

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	忘却 : 創作
Author(s)	岩田, 武
Citation	龍南, 221 : 72 - 79
Issue date	1932-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7060">http://hdl.handle.net/2298/7060</a>
Right	

## 忘却

M—では連絡船を廿分程待たねばならなかつた。待合室の窓の下には墨の様な水がゆれてゐた。唾を吐くとやはり夢の様な微かな音がした。室の向ふの一隅に女がうつむいて居た。亂れた頭髮とよれよれの着物の。泣いてゐる様にも見えた。二三間向ふに和服の男が居た。その男は女を監視してゐる様だつた。

「刑事だな」二郎はすぐ決めてしまつた。

「人生だ」

汚い

「お母さん此處へ置きなまつたらいいわ」

「おー」

「重かつたでしよ随分。」

よくある女らしい街氣の何等交つてゐない二人だけの會話が二郎の耳に入つた。

彼はそちらを一瞥見て海を見た。

眞黒の海には船の灯ばかりが点つてゐた。

A lady in green そんな語が彼の口をついて出た。昨日迄の試験の英語の教科書の中にその型の言ひ方が厭な程あつたから。

「A lady in green 教養あり相な、教養は英語では……」大きな藝者上りといった様な感じのする束髪の庇の馬鹿に大きい彼女の母親。父親らしい人、

二郎は二三歩彼女等と反対側へ歩いた。温度か氣壓か、もつと生理的な原因からか二郎は自分の身体が夢の様につらく動くのを意識した。

人の少い客車が好ましく思はれたので二郎はS——では永いプラットフォームをバタ／＼歩き乍ら一番先の三等車にたどりついた。

彼は昇降臺に一足かけて冷い濕つた把手に手を掛けた時ふとさっきの三人を思ひ出した。ほんの微かに、それはゆきづりにふと目についた自働車の番號の様に忘れてしまふべき三人を。そして彼はもう一度ガランとしたプラットフォームを振り返つた。車内へ二三歩入ると真中位にゐる娘さんの綠色に氣がついた。並んだ母親に話かけてゐる。

母親は細い縋帶をまいた項の上の大きな髪を動かしてうなづいてゐる。

せめて聲が聞える位迄、二郎は高校生らしいやんちゃな氣持で、若しくは、其を銜つてゐる氣持で二三歩進んだ。急に少し靜かになつた車室の硝子窓に動いてゐる彼の姿があつた。二郎は立止つて自分を見た。姿は妙に歪んでゐた。殊に腰から下が小さくなつて曲つてゐた。硝子の性か光線の具合か顔も妙に歪んでゐた。それは決して明かに歪んでゐると言へる程ではなかつた。只顔は妙に間が伸びてゐた。鼻も口も眉も何の統制のないそして妙に三角にすぼがつた顔であつた。

二郎は一步退いて誰も居らぬ座席に娘の方に脊を向けて座つた。

汽車はS——からもう卅分走つてゐた。窓から時々遠い近い灯が見えた。

窓からは時々遠い近い灯が見えた。すぐ目の前に家が見えた時は彼は必ずすぐに蒲團の中で足を伸して寝てゐる人を想像した。灯が見えない時は自分の顔が寫つてゐた。みなれない陰影——眉間の皺を持つた顔を。

「ベース」

miserably cold

鋼の冷さがマントも服も透して滲み込んできた。

二郎はS——驛では何やかに買った。そしてそれをむやみに食べたり飲んだりした時ばかり暖かくて元氣であつた。そうではない時は大抵寒くて氣が減つた。走つてゐる汽車の規則正しい音は何時の間にか一寸の休なしに「不二の白雪やノイエ」を合唱してゐる様に思はれた。錯雜した鋼の組合せが二郎の頭に浮んだ。その奏でる方の歌は節まわしと拍子に於て驚くべき正確さを持つてゐた。そしてレフレインの「溶けて流れて」の所で一段きまつて聲を高めるのであつた。

二郎の心に浮んでくるのはやはり昨日までの試合の結果たつた。だがそれは考へたくない事であつた。

「ではあの三人は何所へ何しに行くんだらう」

「あの人はお嫁に行くんじゃないかな」

彼は内心この大人げない推定に苦笑した。がそれはしふぬく頭から離れようとはしなかつた。

二郎は週刊朝日を取り上げて反對側の席へ坐つた。

その娘は器用に手を後へ廻して、一寸うつむいて髪を掻き上げてゐた。そして次にすぐその「小さい櫛の背側の方の真中所を永く引き伸した様なもの」で母親の髪をかきあげて微笑した。

「あれは……えゝと……鬢立てか」

二郎は可成の時間息をつめ考へた。

そんな娘の一寸した仕草も男兄弟ばかりしかない二郎には全く一段高尚な愛の表示の様な氣がした。

急行列車は一つの驛を嵐の様に過ぎた。

M—白い驛名を書いた板が讀む間も與へず飛び去つた。

次は〇――

×

×

×

×

×

×

二郎には一人の文夫といふ弟があつた。けれど、二人は姓をかへてゐた。文夫はこの〇――のY家へ養子に行つてゐたから。同じ家に居つた思ひ出もそんな古いものではなかつた。

澄み切つた青い空、それに象嵌した様な柿の實、白壁の土藏、腕白な二郎と大人しかつた文夫であつた。

だが時は二人共九州の×高の生徒に變へてしまつた。

文夫は二郎に對しては何時迄も弟だつた。二郎と話す時文夫は思ひもかけぬ若やいだ聲が出るのだつた。しかも駄々ツ子じみた調子で。彼一人で級友に對する時は落付いた大人らしい氣持でゐたが。二郎もそうだつた即ち逆だつた。年の割に子供じみに事しか考へる事の出来ぬ彼も文夫に對する時は重々しかつた。

併しそんな年日も少かつた。

感冒が流行して多くの人々がかゝつて癒つた。だが文夫はそれからどうしてもよくならなかつた。醫師の吞ます發汗劑のお陰で隣の二郎の室まで汗くさかつた。

二郎のよくなれと思ふ心と反對に文夫は氣管支炎、肺炎と進むばかりだつた。

入院!!

文夫は顔を蒼白色にして髯を疎らに生やして天井ばかり見てゐた。そして何時までも二郎を引止めたかつた。

醫師の勧告で歸郷する事になつた。

歸郷!!

無事着いた。悪くなつた。よくなつた。悪くなつた。だがその便りは皆養母の代筆だつた。そしてそれからしばらく便りは絶えてゐた。

そして次は突然死の電報だった。

それからもう一年たつてゐる。

だが二郎は一度として〇——驛を通過する毎に弟を思ひ出さぬ時はない。急行で素通りする時でも。それは初めは泣き叫び度い様なそのくせ何所にも持つて行き所のないしきりの悲だつた。そしてそのはつきりした所のない便り所のない悲が薄れる様になつても思はぬ事に心に食入つてくるのは昔、窘めたりした自責であつたりした。

「文夫 お前が生きてゐてくれたら。」

お前が死んでお父さんの白髪も増えだぜ。

お前が俺なら親父を安心させる事も出来たらうよ。俺は今年も駄目らしい。今年落ちたら止めにやなるまい。高等學校一年終了じや何かな。

「Mさんは巡査になるにはもう少しかと言つたぜ、あいつが。ハ、ハ、巡査!!案外面白いかも知れんぜ。微分も解析も忘れて、微分!! たつた二つしか合はなかつた。駄目だなあ。どーしても。お父さんも氣の毒だ。兄さんも死んだ。他家へ行つたとはいへお前も。頼りにならぬ俺を頼りにしてゐる。見る見る中に他人に壓殺される俺を。人生はコロッセウムに投げ出された人間に似てゐる俺には、そしてその力弱さを文句言ひにいける所はないんだ。」人生は狂人の主權になるオリムピック大會に似てゐる……」

違わんねー。老ひたる工學士は八十圓の月給の爲郵便局で爪を黒くして捺印をしてゐる。息子は落第ばかりしてゐる。親父は嘆くばかりで文句言ふ氣力もない。この寒さで水ばなでも垂らして印を捺してゐるだろ。息子は試験の最中酒を飲んでゐる。酔へもせぬ酒を。

「二郎今年は大丈夫かい。」

親父は寧ろおづ／＼言ふ。

俺は黙つてゐる。そして親父の皺を見て暗くなつてしまふ。十五六の少女の仕事をする毎に旨いの誇が刻みつけるのであらう額の皺を。

「何!! センチだ」 啼かれた様な知覺が起つた。窓の中の二郎の目が喧嘩の時の様に光つた。

「それが何だい。」彼の友人の一人はこんな時必ずセンチメンタルと言つて薄笑をする。

そして二郎には及びもつかぬ冷徹な理論を並べる。彼自身の快樂の爲に。彼に向つて言つてゐるのではない時でも。

だが何だい。それは一つの方程式の抜けたきれいな聯立方程式に過ぎない。

人の心を何でも淺薄に非一般的に動物的に物理的に解釋して獨り見抜いた様な薄笑をする。冷笑が一番優越な事位思つてゐる結局は變挺に持ち廻つて資本主義の没落とかへ持つて來て鼻をうごめかさないと納らない。大抵の事が皆。明日にも勞働者になり相な事を言ふけれど、一番貴公子然としてゐる。尤もその貴公子然といふのは彼自身が貴公子然としてゐると思つてゐるだけである。巡查と兵隊は一生懸命で惡口を言ふ。お蔭で俺は却つて彼に對して黙々たる兵隊や巡查がなきになつた。

「聯隊長以下士官十數名戰死……」の號外を見て「兵士が十數名で士官等も十數名。割合して大した數だ。怪しいぞ」 怪しいぞ!! 如何にも卅錢のあまり賣れない何とか叢書にあるらしい考へ方だ。彼奴は可愛らしい奴さ。

結局。巡查、一寸これより外に職業も有りそうでもない。

俺がこんなに落ちる事を信じ乍ら歸つて行くのに親父は何も知らずに今頃眠つてゐるだらう。何も知らないで。

大學といふ所はお父さんも僕もこんなに苦しんで行く所程價值のある所でせうか。

文夫!! お前も俺と反對だつたらよかつたね。俺はこんな大きな圖体をしてゐるくせに子供臭くて氣が弱い。すぐ自棄になる意氣地なし。

お前は何でも黙つてゐたね。苦しい時も。

何時やら俺も我儘だつた―神經衰弱だつたんだが罵つた事もあつたね。お前は黙つてうつむいてゐた。俺は憎々し相にその頭

を睨んでゐたつけ。あれだけは今でも實際濟まぬと思ふ。妙に濟まぬと思ふ。

汽車は〇——驛の構内へ入つたらしく俄に引込線の輻輳の部分に當る鋼の事の音の反響で賑はしくなつた。

二郎は帽子の庇を窓硝子に強く壓しつけて外を見た。木道の明るい暗い驛はたつた一人の驛長を乗せたまゝ忽ち後へ歪んで去つた。最後に白い驛名を書いた板が目痛くして飛び去つた。

「おい丈夫」二郎は目を閉ぢた。

一瞬の後はもう眞黒な窓ばかりだつた。彼の顔の影の部分以外は窓はねむりこけてゐる人々の車内をうつしてゐた。

星明りが黒い山をあるかなきかに浮かしてゐた。見馴れた景色である。晝ならば埃の積つてゐる道が夜目にも白つぽく細々と斷續してゐる。灯が立つてゐた。それはやはり今度も急に十文字の永い光茫を眼の中に送り込んだ。

二郎はふと眼を轉じた。窓の鏡の室の内が彼の注意に入つて來た。

何時の間に娘と母親が目覺めて話をしてゐる。娘が何か言つた様だつた。母親が笑つた。娘も一語に笑ひ出した。汽車旅行の辛さ等に少しもわずらはされてゐない二人だけの世界の樂を歌つてゐる筈であつた。

娘は一區切毎に首を動かして大きな目で上目づかひに母親をのぞきこむ。そして同じ様な容易さで話をつゞけてゐる。

彼は娘が自分を見たのを見た。靜かに沈着いた態度で。勿論うすぐらい硝子の鏡の中である。その顔には今迄の微笑が白い齒に残つてゐたけれど眼は幾分二郎の不躰を柔かく非難してゐたのを二郎は直に感じた。勿論その中の非難し得るだけの親しさも交つてゐるのを感じない譯ではない。彼女の態度には今迄の母親に對する甘へ氣味の娘の表情は消えて一人前の完成した女性の威嚴が表れてゐた。それは中途半端な子供らしい二郎を充分にはにかませうつむかせるに足るものだつた。

窓はもう目の前に擴がつた堤を眞横に走らせてゐるばかりであつた。

「具合の悪さ!! 併し一方ではこのたつた三人だけ目覺めてゐる車室の中で顔を見合つてゐる位は當然らしい氣もした。少くも



も鏡の中位では。

二郎は目をあげた。

娘は微笑しながら母親にうなづいてゐる。

「花!!」 花!! お嫁さん!! 學士!! 大學!! 試験!! 發表!! 過敏になつてゐた二郎の心の中にはこの様なものが傷んだフ  
半ルムのように朦朧たる形で映り去つた。

今から三百算へる間に三度笑つたら俺は及第する。又殆ど囁かれた様な知覺が心に浮んだ。一つ、二つ……三九、四十……  
二人は明かに微笑した。

七五、七六……數へる早さは汽車の響に一致しはじめた。そのあたりで明かに笑つた。

百八十五、百八十六。娘が口に手をあて、目を細くした。白い齒がうすぐらい鏡に寫つた。

これは笑つた部類に入るかな。もう一度笑つたら確定として二百一、二百二……二百九十九、三百」  
だが二人はその儘だつた。

二郎は氣が沈まぬ譯にはいかなかつた。

馬鹿な!! 馬鹿々々しい さつきのあれは笑つたとすれば三度だ。笑つたんだ。が、それも形ばかりしか心を慰めなかつた。

二郎の窓の外を見た。そして先刻考へてゐた事を思ひ出そうとした。悲しい憶出がこの瞬間何か好ましさを持つてゐた様に思  
はれた。少くともこの所在なさよりは。彼は頸をガラスにもたれかけて足を前の客の腰掛けの下へうんと伸して、小さな幾分の  
わざとの欠伸をした。

近頃よくある苦惱がやつて來た。二郎は先刻考へてゐた續きの最初の事が何であつたか一寸思い出せなかつた。悲しい憶出に  
は違なかつた。だが今は何となく好ましい様な悲しい憶出だつた。

彼は軽く口を引きしめ乍らその糸口を探りあて様とした。併し二郎は一生懸命になつてゐたのにどうも思い出せなかつた。